

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 28 日現在

機関番号：24201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370956

研究課題名(和文) グローバル経済下のモンゴルにおける「感染するシャーマン」現象に関する研究

研究課題名(英文) A Study on Pandemic of Shamans and Globalised Society in Contemporary Mongolia

研究代表者

島村 一平 (Shimamura, Ippei)

滋賀県立大学・人間文化学部・准教授

研究者番号：20390718

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、現代モンゴルにおいて「感染症のようにシャーマンが増えている」という現象を解明することを目的とした。3年間の研究を通じて、資本主義的競争が激化する首都ウランバートルにおいて敗者たちの傷ついたプライドを癒す装置としてシャーマニズムが存在することがわかってきた。また鉱山都市において増え続けるシャーマンたちは同地で生じる貧富の格差に対して、「精霊の指示」で再分配を行っていることもわかった。こうした成果は、国内外の学会で発表したほか、日本語や英語の論文で発表した。最終年の研究のまとめとして、シャーマニズム研究が盛んなハンガリーの研究者を招聘し、国際ワークショップを主催した。

研究成果の概要(英文)：In this study, I examined the phenomenon I describe as "a pandemic of shamans" in the Mongolian capital of Ulaanbaatar and elucidated the nature of the shamanism that, while building cultural and social bonds on the one hand is also fracturing and splintering those bonds on the other. By acquiring an imaginary social position, the people who become shamans overturn social relationships and fracture family bonds. Shamanism also gives birth to ethical models that differ from shaman to shaman. I concluded by examining whether the practices of the shamans is a phenomenon unique to the post-socialist/ globalising period or a phenomenon unique to shamanism. In this theme, I wrote several academic papers both in Japanese and English, and finally I organized the International workshops entitled Between Secularity and Religion: Shamanic and Buddhist Practices in Mongolia: Past and Present, which ended successfully.

研究分野：文化人類学

キーワード：シャーマニズム モンゴル プライド 資本主義的競争 グローバリズム 富の再分配 親族組織の再構築

1. 研究開始当初の背景

1990年代より、モンゴルを対象としたシャーマニズム研究は、欧米の社会・文化人類学者たちの間で学問上の「ホットスポット」となっている。モンゴルは、1990年初頭まで社会主義であったので文化人類学的フィールドワークが不可能であった。しかし民主化と同時に多くの海外の研究者が研究上の「空白地帯」であったモンゴルへ殺到することとなった。シャーマニズム研究に関しては、フィールドワークが出来ない以上、世界観や象徴を巡る研究に限られていた。

そうした中、1990年代よりイギリスの人類学者 C.ハンフリーによって社会的文脈との関係性の中でシャーマニズムを考察する研究[Humphrey&Onon1996]に先鞭がつけられると、2000年を前後して、欧米から10人近い若手研究者がモンゴルでシャーマニズムをテーマにフィールドワークを行うようになった。しかし彼らは、シャーマンが「精霊の託宣」によって父系系譜を創造することでエスニックなアイデンティティを構築しているという事実気づかず、申請者の論文が先んじてケンブリッジの Inner Asia 誌に掲載された[Shimamura2004]。さらにこの研究の一部は、論文や事典の項目として日本はもとより、ドイツ、アメリカ、中国、モンゴルなどで発表され、国際的に高い評価を得てきた。その集大成として申請者は2011年には科研費による出版助成を得て加筆修正し、『増殖するシャーマン モンゴル・ブリヤートのシャーマニズムとエスニシティ』として出版した。この研究は、「シャーマンが人口の1%に至るほど増え続けている」という増殖現象を通じて、モンゴル国に居住する少数集団であるブリヤート人(モンゴル・ブリヤート)のエスニックな帰属意識がいかに再構築されているのかを明らかにしたものである。また、2012年度には科研の翻訳出版助成が採択され、上記の『増殖するシャーマン』は、*The*

*Roots Seekers: Shamanism and ethnicity of Mongol-Buryats* として出版されることとなり、出版準備中にあった(その後2014年に出版された)[Shimamura2014]。また、本書のモンゴル語への翻訳も進行中であった(その後2016年に出版された)[Shimamura2016]。

モンゴルの一エスニック集団内で起こったシャーマン増殖現象は、2000年代中ごろを境にエスニックな境界を越えてマジョリティであるハルハ・モンゴル人(人口の80%を占める)に伝播し、首都ウランバートルや鉱山都市を中心に広まっている。本研究は、申請者がこれまで調査してきた現象と連続性のある現象を対象とした研究とすることができる。この「感染症のようにシャーマンが増え続ける現象は、国際的に研究者の関心もたれ続けており、アメリカやイギリス、デンマークの研究者がすでに「参戦」を開始している。

[参考文献]

Ippei Shimamura, 2004, *The Movement for Reconstructing Identity through Shamanism: A case study of the Aga-Buryats in Post-socialist Mongolia*, *Inner Asia* vol.6(2), Cambridge: The White Horse Press, 197-214.

Ippei Shimamura 2014 *The Roots Seekers: Shamanism and Ethnicity among the Mongol-Buryats*, Yokohama: Shumpusha Publishing.

Ippei Shimamura 2016 *Ulaanbaatar: Shamanism and Ethnicity among the Mongol-Buryats*, 478p

2. 研究の目的

人口300万人弱のモンゴル国において、現在シャーマンの数が約1万5千~2万人に達し

ていると言われている。首都ウランバートルや鉱山都市を中心にエスニシティや年齢、ジェンダー、貧富に関わらず、日に日にシャーマンは増え続けている。驚くべきことに、シャーマンになっているのは、一般の人々のみならず、有名な芸能人はおろか国会議員まで含まれており、現地では「まるで感染症のようにシャーマンが増えている」と形容されている。本研究では、グローバル化した政治経済的状况のもと、競争社会を生きる現代モンゴルの人々の中からシャーマンや周囲の人々に焦点を当て、「社会問題」化したシャーマニズムの背後にある文化・社会的コンテキストを「プライド」をキーワードに読み解いていくことを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究は、文化人類学的フィールドワークに基づいて遂行される。

調査対象地としては、モンゴル国ウランバートル市、南ゴビ県ハンボグド郡（オウートルゴイ金・銅鉱の鉱山都市）およびツォグトツェツィー郡（タワントルゴイ炭鉱 鉱山都市）が中心となるが、小規模鉱山の周辺地域も視野に入れる。

本研究は、申請者1名が中心になって遂行されるが、海外共同研究者との緊密な連携のもとに行われる。最終年度には、海外共同研究者を招へいた上で国際シンポジウムを滋賀県立大学で開催することを予定した。

### 4. 研究成果

3年間のフィールド調査を通じて、資本主義的競争が激化する首都ウランバートルにおいて敗者たちの傷ついたプライドを癒す装置としてシャーマニズムが存在することがわかってきた。

まず現代モンゴルの人々は、自分に何らかの災厄が降りかかると「ルーツ（先祖霊）にねだられている」と解釈する説明様式（災因

論）を受け入れている。このルーツ災因論によって、病気や交通事故や仕事がかまくいかない、家庭内の不和といった悩みがあると、人々はほぼ自動的に「ルーツにねだられている」と発想し、彼らは、シャーマンになる道を選択しているのである。

現在、新たにシャーマンとなった者たちは想像上の社会的地位を獲得することで、親族や信者から崇敬と畏怖の念を得ている。たとえば、かれらに憑依してくる霊は、かつての「王侯貴族」や伝説上の英雄だとされることが多い。中には失業者であった20代の高卒の若者がシャーマンとなることで「名誉教授」「博士」といった称号を名乗るという事例もあった。また、父親との不和に悩んでいた大学教授の息子がシャーマンとなることで、「偉大なシャーマン」であるとして父親にかしずかれるようになったという事例もあった。つまりかれらはシャーマンになることで、社会的な力関係を逆転させているのである。

こうした現代モンゴルのシャーマニズムは、もはや伝統的な狩猟・牧畜社会を支える信仰形態ではないことは確かである。

現在のモンゴルでは、資本主義的価値観が急速に浸透する中、見栄えのする大型の自家用車や最新の携帯電話、高い社会的地位などを他者にひけらかすことによって自らのプライドを満たそうとする傾向が非常に強くなっている。現代モンゴル社会は自らの象徴財や社会的地位を巡って常に他人と争う「プライド競争社会」であるといっても過言ではない。こうしたプライドのことをモンゴル語で「ネル・トゥル」という。直訳すると「名前のポリティクス」という意味となる。まさに彼らは自らの「名誉」をかけてしのぎを削っているのである。しかし、かれらのプライドの欲望が完全に満たされることは決してない。財産や社会的地位にのみプライドを見出す限りにおいては、際限なく「上には上

いる」からである。

とまれ、こうした競争に疲れ傷ついたかれらのプライドを癒してくれるのがシャーマニズムであった。たとえば、あるシャーマンに憑依してきた“先祖霊”は、妹が自慢げに持っていた高価なスマートフォンを「こんなものは本物のモンゴル人に必要ない」と破壊してみせることで溜飲を下げた。また、ある女性歌手は売れなくなった頃から酒浸りとなったが、その後シャーマンへの道を歩み始めることで自尊心を取り戻した。

以上のことから、モンゴルにおける感染するシャーマニズムは、急激な経済発展の陰で競争に喘ぐ人々の「苦悩のメタファー」だといえよう。

さらに鉱山都市においてフィールド調査を行った結果、増え続けるシャーマンたちは同地で生じる貧富の格差に対して、「精霊の指示」で再分配を行っていることもわかってきた。

以上の成果は、国内外の学会で発表したほか、日本語や英語の論文で発表した。本研究の成果の一部は、ケンブリッジの INNER ASIA 誌に掲載された。

最終年の研究のまとめとして、2016年11月にシャーマニズム研究が盛んなハンガリーの研究者を招聘し、国際ワークショップ“Between Secularity and Religion: Shamanic and Buddhist Practices in Mongolia -Past and Present”を主催し、伝統的なシャーマニズムとの比較検討を行った。

また、本研究の成果を国際的なシャーマニズム研究誌「SHAMAN」に投稿し、アクセプトされ、2017年6月現在、印刷中である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 8件)

Ippei Shimamura (Forthcoming)

” A Pandemic of Shamans: The overturning of social relation, the fracturing of community, and the diverging of morality in contemporary Mongolian shamanism., *SHAMAN*( Journal of International Society for Academic Research on Shamanism), Vol.26.No.2. (17,000 words, accepted)

[単著・査読有]

Ippei Shimamura 2016a

“ Y

”

?,

*Journal of the Archaeology, History, and Humanitarian*, 12(11), The Ulaanbaatar State University, pp.139-142.

[単著・査読有]

Ippei Shimamura 2016b Migratory Shamans: Shamanic “ Propagation ” from Mining Town to Mining Town in Mongolia. In Takako Yamada and Toko Fujimoto(eds.) *Senri Ethnological Studies* 93, Migration and the Remaking of Ethnic/ Micro-Regional Connectedness( National Museum of Ethnology, Japan), pp275-292.

[単著・査読有]

島村一平 2015b「鉱山開発に伴って移動するシャーマニズム実践 - モンゴル南ゴビ県の事例から」 『CIAS Discussion Paper No.47 移動と宗教実践 - 地域社会の動態に関する比較研究』(小島敬裕編) 京都大学地域研究統合情報センター、pp. 5 - 16.

[単著・査読有]

Ippei Shimamura 2014. Ancestral Sprints Love Mining sites-Shamanic Activities around the coal and gold mining sites in Mongolia. In Uradayn E.Bulag, Ippei Shimamura and Burensain Borjgin (eds.) *Inner Asia Special Issue*(Vol.16, No.2)

*Geopolitics and Geo-Economics in Mongolia: Resource Cosmopolitanism*  
(Brill: Cambridge, pp.393-408.

[単著・査読有]

島村一平 2016b「地下資源に群がる精霊たち モンゴルにおける鉱山開発とシャーマニズム」電子ジャーナル『シノドス Synodos Academic Journalism』 2016年08月26日、

<http://synodos.jp/international/17441>

[単著・査読無]

島村一平 2016c「シャーマニズムという感染症：グローバル化が進むモンゴルで起きている異変から」電子ジャーナル

『シノドス Synodos Academic

Journalism』 2016年2月24日

<http://synodos.jp/international/16228>

[単著・査読無]

島村一平 2015a「シャーマンは、果たして「死者の声」を聞いているのだろうか 現代モンゴルのシャーマンたちの「憑霊」の語りから」『BIOSTORY』24: 61-65、生き物文化誌学会。[単著・査読無]

[学会発表](計 9件)

Ippei Shimamura 2016a The Dependent Resistance on/against the Mining Development: A Case Study on Shamanic Activities around a copper-gold mining site in Mongolia, International Symposium “Environment of Northeast Asia: Cultural Perception and Policy Engagement”, Dec. 3<sup>rd</sup>, ~4<sup>th</sup>, 2016 at Tohoku University, Sendai.

Ippei Shimamura 2016b The organaizer and chair of the workshop, “The aim of the workshop”, “Closing Adress”, International workshop “Between Secularity and Religion: Shamanic and Buddhist Practices in Mongolia -Past and

Present” Nov. 25<sup>th</sup>, 2016 at the University of Shiga Prefecture.

Ippei Shimamura 2016c What 's Behind A Pandemic of Shamans?: The overturning of social relationships and the diverging of morality in contemporary Mongolian shamanism. The 11th International Congress of Mongolists, August.15-17<sup>th</sup>, National University of Mongolia, Ulaanbaatar.

島村一平 2016d「『増殖するシャーマン：モンゴル・ブリヤートのシャーマニズムとエスニシティ』を語る」、京都人類学研究会例会、於：京都大学(5月26日)(招待講演)

島村一平 2016e 「感染するシャーマン：現代モンゴルでシャーマンが激増している理由を考える」ハワリンバヤル2016 (モンゴル・カレッジ)、於：練馬区立光が丘図書館(5月1日)

Ippei Shimamura 2015 Pandemic of Shamans in Contemporary Mongolia: Bestowal of Imagined Social Status, Disruption of Social Bonds, and Differentiation of Morality, International Conference of ISARS (International Society for Academic Research on Shamanism), Oct.9<sup>th</sup>-13<sup>th</sup>, 2015, European Cultural Centre of Delphi, Deiphi, Greece.

島村一平 2014a「鉱山を渡り歩くシャーマン：モンゴルにおける地下資源開発と『依存的抵抗』としての宗教実践」国際シンポジウム「内陸アジアにおける資源開発と社会・環境の変容 モンゴルとチベットのフィールドから」、2014年12月14~15日、(於：滋賀県立大学)

島村一平 2014b「増殖するシャーマン：モンゴル・ブリヤートのシャーマニズ

ムとエスニシティ」京都大学 CIS 研究会「宗教実践の時空間と地域」2014 年 11 月 29 日（於：京都大学）

島村一平 2014c ‘Migratory Shamans: Shamanic “Propagation” from Mining Town to Mining Town in Mongolia’ . International Workshop “Migration and the Remarking of Ethnic/ Micro-Regional Connectedness” Dec. 7-8, 2014. (National Museum of Ethnology, Osaka)

〔図書〕(計 4 件)

Ippei Shimamura 2016 Бөөгийн халдвар-Буриадын үндэсний үзэл ба угсаажилт, Ulaanbaatar: ШУА-ийн Түүх, Археологийн хүрээлэн, 478p

(『増殖するシャーマン：モンゴル・ブリヤートのシャーマニズムとエスニシティ』モンゴル語版、モンゴル科学アカデミー・歴史・考古学研究所：ウランバートル)

島村一平 2015「感染するシャーマン 現代モンゴルのシャーマニズムにおける逆転する社会関係、分裂する共同性、微分化するモラリティ」藤本透子(編)『現代アジアの宗教 - 社会主義を経た地域を読む』、春風社、pp. 187 - 244 . 棚瀬慈郎・島村一平(編) 2015、『草原と鉱石：モンゴル・チベットにおける資源開発と環境問題』、明石書店。全 310 頁。

Uradyn Bulag, Ippei Shimamura and Burensain Borjgin (eds.) *Inner Asia Special Issue (Vol. 16, No. 2) Geopolitics and Geo-Economics in Mongolia: Resource Cosmopolitanism.* (Brill: Cambridge) pp. 229 .

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

島村一平 (SHIMAMURA Ippei)  
滋賀県立大学人間文化学部・准教授  
研究者番号：20390718

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：

(4) 研究協力者

サンピルドンドブ・チョローン  
(Sampildondov Chuluun/モンゴル科学アカデミー歴史学・考古学研究所・所長)  
ビルタラン・アーグネシュ  
(Birtalan Agnes/ハンガリー・ローランド・エトヴェシュ大学モンゴル・内陸アジア学部長・教授)  
シヨムファイ・カラ、ダーヴィッド  
(Somfai - Kara David/ハンガリー科学アカデミー民族学研究所・研究員)